

平成22年度受賞パンフレット



“往来”と“all right”

—都市と農山漁村の共生・対流表彰事業—

第8回

# オーライ!ニッポン大賞



バッテリーキャンプ



シャワークライミング

## 第8回 オーライ! ニッポン大賞

第8回を迎えました本表彰事業は今年度、全国より86件の応募を頂くことができ、大変感謝しております。ご応募を頂きました内容は、日々のご努力とご尽力で長年の実績を重ねられているもの、また今の時代のニーズにマッチした新しい交流の形を創り出しているもの、若い世代の柔軟なアイデアで精力的に取り組んでいるものなど、取り組みの1つ1つが、大変内容が深く、各地において「都市と農山漁村の共生・対流」(人・もの・情報の行き来)の動きが、着実に前進しているという手応えを感じております。

子ども達に農林漁業の大切さ、自然環境の素晴らしさを伝える活動、学生と農山漁村地域が共に課題解決に取り組む活動、集落維持や耕作放棄地解消の取り組みから交流事業や環境活動に発展している取り組み、女性のアイデアや行動力で商品開発・販売など地域の元気を生み出す活動など、交流に留まらず、広く地域活動に波及する内容の事例が多く見られました。

さらに、今年度も都市と農山漁村の共生・対流の観点において、類似性の高いと思われる他団体主催の表彰事業と連携し、特徴ある優良な活動事例をご推薦いただき、オーライ!ニッポンの推進に拍車をかけることが出来ました。

審査委員会では、審査基準(\*)に基づき、熱心な議論を行い、オーライ!ニッポン大賞グランプリ(内閣総理大臣賞)、オーライ!ニッポン大賞、審査委員長賞、ライフスタイル賞並びに、オーライ!ニッポン フレンドシップ大賞、計15件を選定いたしました。

審査にあたって、応募内容はどれも大変優れたものであり、各賞の選定にあたっては、審査委員の活発な意見が交わされ、絞り込みは大変な作業となりました。

審査委員一同、ご応募を頂きました皆さまの取り組まれる活動に対して深い敬意を払いながら、審査にあたりました。

結果としては、行政主体から行政との連携による民間主体の取組みに移行し、地元、行政、学校、企業等各種団体との連携を強め、教育旅行の受入体制を強化し、都市のニーズを捉えた体験プログラムの開発を行いながら、年々受入の実績を伸ばしている「ふるさと体験学習協会」(岩手県久慈市)がグランプリに選ばれました。その他入賞団体は、その多様な取り組みにより、他の地域の都市と農山漁村の共生・対流推進良きモデルとなるとともに、その活動そのものも今後ますますの発展が期待されております。

最後に、応募頂きました全内容は、これからの活動の展開が大いに期待したいもの、新たな事例として全国に紹介したいものとして、今後も自信をもって活動頂きたいと思います。

審査委員一同、応募頂きました皆さまの今後より一層のご活躍を祈念しますとともに、再度の挑戦を期待しております。

平成23年3月9日

オーライ!ニッポン大賞審査委員会

会長 安田 喜憲

### (\*) オーライ!ニッポン大賞 審査基準

- ・新規性(新たなライフスタイルの提案、普及に関する取り組みであること)
- ・継続性(活動に多様な主体が参加・連携し、継続的な活動実績があるか)
- ・モデル性(他地域への波及効果が期待できるか)
- ・独自性(地域固有の資源や個性を十分に活用し、オリジナリティがあるか)
- ・効果性(経済効果・社会的効果等が生まれており、持続して発現すると見込めるか)

# オーライ!ニッポン大賞グランプリ

たいけん がく しゅうきょう かい  
ふるさと体験学習協会

いわてけんくじし  
(岩手県久慈市)

内閣総理大臣賞



## ■応募団体等の概要

活動年数 6年(前身からの活動12年)

年間の活動日数 365日

年間の交流・来場者数など

おおよそ 7,000人

## ■PRコメント

ふるさと体験学習協会では、久慈市内外の交流による地域活性化を目指して、教育旅行や体験活動等の受入れを行っている。指導はすべて地元住民によるもので、山や海など豊かな自然を活かした体験や、昔ながらの知恵や技術、食文化の継承活動など様々な体験プログラムにより受入れを行っている。この取組みは、交流人口の拡大と受入者との交流によって地域経済の活性化と地域の元気づくりに繋がっており、行政や関係団体とも連携した継続的な取組みとなっている。

## ■応募の概要

久慈市は太平洋に面し、約30万本の白樺群生林、クマヤムササビなどの野生動物が棲むブナやミズナラの原生林が広がる平庭高原、伝統の海女漁などが行われる小袖海岸など、山・里・海に囲まれた自然豊かで多くの伝統文化が残る街である。平成12年度から旧山形村が、過疎化対策の一環として交流人口の拡大による地域の活性化を目的に取組んだ教育旅行の受入事業を引継ぎ、旧久慈市との合併を機に、平成18年度にふるさと体験学習協会を設立。地元、行政、旅行会社、学校との連携を強化するとともに、体験プログラムの開発を行いながら、教育旅行や体験活動の受入れ推進を図っている。原生林等を活用したエコトレッキング、森の一部をまるごと学校に貸し出し、専門家の指導の下で枝打ちや間伐など木の育ちやすい環境整備を行う林業体験、森林の中を車椅子でも散策できるようボランティア



精神に基づくフォレストボードの設置、首都圏と地元の子ども達が交流して行う自然体験キャンプ、直接民家の方とふれあう民泊体験等、豊富な体験プログラムを通じて、交流によって生まれる心の温かさや信頼感、机上では得られないことへの気づきの提供を目指している。また日本短角牛の産直を契機に始まった首都圏消費者グループとの交流ツアーでは、生産者宅への民泊、自然体験、郷土料理作り等で生産者と消費者が結びつき、産直が継続されている。行政主体から行政との連携による民間主体の取組みとなり、また受入れも飛躍的に増加。平成17年度4校1,190人、同18年度は6校2,500人、同19年度は13校4,980人、同20年度は16校5,477人、同21年度は16校5,447人、同22年度15校5,446人、6年間で25,000人を受入れ、交流事業を通じて地域住民の意識変化・意欲高揚につながり、地域経済の活性化、地域コミュニティーの活発化に大いに貢献している。



# オーライ!ニッポン大賞

とくいでひかりかど野町しおやまちきゅうまのきしょうがっこうかんりくみあい  
特定非営利活動法人 塩谷町旧熊ノ木小学校管理組合

とちぎけんしおやまち  
(栃木県塩谷町)



## ■応募団体等の概要

活動年数 8年

年間の活動日数 150日

年間の交流・来場者数など

おおよそ 5,000人

## ■PRコメント

当法人が活動拠点としている、塩谷町やすらぎの交流体験施設（愛称：星ふる学校「くまの木」）は、平成11年3月末をもって閉校となった熊ノ木小学校を改築した宿泊型体験学習施設です。私たちは、ここが地域住民にとって思い出の詰まった“小学校”であったという経緯、そして、日本三百名山にも選定されている高原山麓の中山間農業地域という環境を大切に、また、首都圏から車で2～3時間の距離にあるという地理的条件を生かしながら、地域社会や地域の環境向上への貢献を目指して様々な活動を展開しています。

## ■応募の概要

塩谷町熊ノ木地区は、水田や畑、山林等の豊かな自然に囲まれる中山間地域で、平成12年度冬期に環境庁が実施した「全国星空継続観測会」で星のみえやすさが観測地点中トップになるなど、星空も美しい地域である。平成11年3月に廃校となった熊ノ木小学校を宿泊型体験学習施設（星ふる学校「くまの木」）として再生し、その運営を地域内外の住民で組織するNPO法人塩谷町旧熊ノ木小学校管理組合が担い、都市農村交流を核に活動している。体験メニューは、自然体験、伝統工芸、農林業、郷土料理など35種類、主に塩谷町在住のボランティアが50名ほど登録して指導している。農林業体験では、単発のプログラムだけではなく通年型会員制の蕎麦づくりやパン小麦栽培等も実施。また平成20年度から、くまの木を滞在・宿泊や自然体験の拠点に、横浜市内の小学校の修学旅行を受け入れて、地域



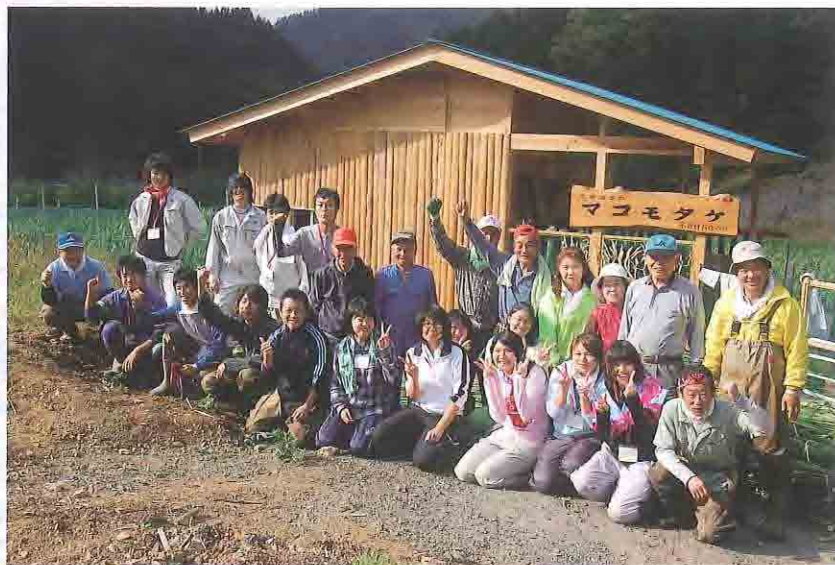
の約20軒の農家が農業体験や生活体験を提供している。地域内での活動も盛んで、小中学生を対象に「くまの木自然クラブ」を組織し、自然観察や野鳥観察等を実施。年間プログラム作成や観測会の指導には、栃木県立博物館も協力している。背後の里山の整備・保全活動を行う「くまの木里山応援団」では、毎月1回、町内外19名の団員が活動している。宿泊施設運営事業は、平成14年度（開業）1,890名であった年間宿泊者数が、平成22年度は6,000名前後となる見込みで、平成22年11月までの合計数は、宿泊者数35,909名、体験学習参加者数20,514名。宿泊者の98%が町外在住者、全体の65%が首都圏在住者である。運営面では、常勤・パートを含め常に10名程度を雇用。その他にも、くまの木コンサートの開催、地域通貨や地域農産物の積極的な利用や、落ち葉での堆肥づくり、食品ロスの削減、米のとき汁の利用など環境を意識した取組も行っている。



# オーライ!ニッポン大賞

とうきょうのうぎょうだいがく とうきょうのうぎょうだいがく  
東京農業大学 多摩川源流大学

とうきょうとせたがやく  
(東京都世田谷区)



接した課題や知恵を学ぶことができます。このように生活に根付いた農林業を都市部の学生が体験しに来ることで、農山村と都市部を結ぶ人材を育成するだけではなく、地域を元気にし、それが流域全体や他流域などへ様々な形で広がっていく活動を行っています。

## ■応募の概要

地域と大学が協力し、本物体験を学ぶ人材育成の場として多摩川源流大学が誕生。多様な専門分野の学生による体験教育（農環境教育）を展開し、多摩川上流域・源流域の再生を進めることを主な目的に活動している。一番の特徴は、大学の講義で学んだことが、実体験で学習できる点で、広く浅く農林業を学ぶ「基礎コース」では、様々な分野の専門家を招く座学と農家体験などの実習を行い、知識と経験を有機的に繋げている。2年目以降の「応用コース」では、更なる専門的な技術を学ぶために、学生がコースを選択する仕組みで、年間を通じて同じ講師から学ぶことから、密接な関係ができ、地域についてより多くのことを学ぶことが出来る。地元住民が講師であることから、学生と住民が直接コミュニケーションを取れて、地域のファンになる



## ■応募団体等の概要

活動年数 4年

年間の活動日数 365日

年間の交流・来場者数など

おおよそ 1,000人

## ■PRコメント

多摩川源流大学は大学生たちに生きた学びの場を提供しようと、東京農業大学と山梨県小菅村が協力して村全体をフィールドに大学の講義として実習を行う取り組みです。山梨県小菅村はいわゆる源流域であり、生業そのものが学生にとって生きた教科書となっています。また、それらを大学の先生からだけではなく地元に住む住民を講師に認定し指導してもらうことでより地域に密



学生も多い。廃校となった小学校を再生利用して、小菅村全体をフィールドに授業を実施しているが、平成22年度からは下流域で活動する団体に参加して流域課外活動を実施し、鬼怒川や鮫川など他流域の活動にまで連携が広がっている。このような取り組みから、授業だけで年間延べ300人を超す学生が参加しており、源流大学開講からこれまで約5,000人近くが活動に参加している。この授業は全学部、全学科、全学年が対象のため、普段林業や農業に触れることのない学生も参加し、座学で学べない技術や地域課題の現状などを体得している。昨年度から地域住民と学生と一緒に村の新しい特産品「マコモタケ」を栽培、また自主的に活動を行う学生有志団体「源流放課後の会」が誕生して、住民と一緒に田んぼの再生に取り組み、収穫した米を学校給食に提供するなど新たな展開に繋がっている。

# オーライ!ニッポン大賞

ざい だん ほう じん き わ ちょう こう しゃ  
財団法人 紀和町ふるさと公社

み え けん く ま の し  
(三重県熊野市)



## ■応募団体等の概要

活動年数 18年  
年間の活動日数 240日  
年間の交流・来場者数など  
おおよそ 2,000人

## ■PRコメント

（財）紀和町ふるさと公社は、530枚にまで減少し、荒れてしまった丸山千枚田の復元と保全を目的に、平成5年に設立された財団法人です。現在は、1,340枚の規模と美しい棚田景観の保全活動とともに、棚田オーナー制度による都市住民との交流活動を行っております。また、棚田保全とともに、「熊野地鶏・香酸かんぎつ新姫・さんま醤油・きじ・梅干し・味噌・高菜漬」などの地域特産品の生産加工販売を行っており、地域の雇用確保と地域経済の高揚に寄与する活動を行っています。

## ■応募の概要

熊野市の文化遺産である丸山千枚田の保全を市から委託され、地元の丸山千枚田保存会とともに、棚田の保全活動を行っている。慶長6年（1601年）には2,200枚あったとされる千枚田も、平成初期には530枚までに減少し、その大部分が荒れた状態であったことから、丸山千枚田の復元を目的に（財）紀和町ふるさと公社を設立。当時、旧紀和町が鉱山の閉山により、観光の町への転換期でもあり、行政と地域住民が協働で、木の伐採、切り株の掘り起こし、石積みの修復、床作りなど手作業で取り組んだ結果、平成5年から5ヵ年をかけて810枚の復元に成功し、現在は1340枚の日本一の棚田の景観を作り出している。平成8年度からは復元した田の一部を利用し、保全活動の支援を目的に棚田オーナー制度を開始。15年目で延べ1591組（7,510人）が登録し、都市と農村の交流が図られていると



ともに、日々休むことなく棚田保全活動が行われている。また年間を通じてオーナーが訪れるよう、畦塗り作業、虫おくり行事、案山子作りなど昔ながらの農作業体験と伝統行事の充実にも努めている。設立当初から生産加工販売を行っている「梅干、味噌、高菜漬け」に加え、熊野市の新たな特産品として「熊野地鶏・香酸かんぎつ新姫・さんま醤油」の生産加工販売にも着手し、熊野ブランドの確立や地域雇用の場として役割を果たしている。平成11年には経済的支援が行える「丸山千枚田を守る会」制度を発足、また公社が管理する3.8haのほ場で収穫される千枚田米の販売、丸山千枚田フォトコンテストの開催と入賞作品によるカレンダー販売等により、丸山千枚田の保存活動費を創出している。棚田オーナー制度の拡充で年々交流人口は増加。地元住民とオーナーの交流、またオーナー同士の交流なども深まり、丸山千枚田の支援の輪が強く広がっている。



# オーライ!ニッポン大賞

## いこま<sup>たなだ</sup>棚田クラブ

ならけんいこまし  
(奈良県生駒市)



### ■応募団体等の概要

活動年数 8年

年間の活動日数 70日

年間の交流・来場者数など

おおよそ 1,800人

### ■PRコメント

荒廃した棚田の景観ボランティアとして2003年設立の任意団体。毎週1回30名ほどのボランティアが棚田に出かけ景観整備、援農、自然環境教育を3本の柱に活動を続けて8年になる。

奈良生活協同組合(奈良コープ)、近畿大学農学部などと協働で草刈り、間伐、田んぼ、野菜畑、菜の花エコプロジェクト、ピオトープ、竹炭、しいたけ栽培、小学生対象の棚田・里山体験会など数多くのイベントを実施し都市住民と農村の交流を図って棚田・里山の再生と地域活性化を目指している。

### ■応募の概要

生駒市西畑町は、生駒山を越えて奈良と大阪を結ぶ暗越奈良街道に面しており、遣唐使が通った道とも言われる地域である。この由緒ある景観を残そうと地元住民が「西畑棚田を守る会」を結成したが、20世帯80人の集落では力不足で困っていたところ、自然環境や植物生態系等を学ぶNPO法人シニア自然大学校内で有志を募り、「いこま棚田クラブ」を設立。講座修了生を中心に、毎週1回の定例活動やイベント等の特別活動を含め、年間70日以上は現場で活動を行っている。会員は約70名で毎回30名程が参加。行政の支援は受けず、民間ボランティアと地域自治会が協働で棚田の再生を行っている点が特徴で、棚田の休耕田の草刈り(3ha)や石垣出し、休耕田を利用したそばや大豆の栽培・作業支援のほか、小学生対象の棚田里山体験や大学生対象の里山実習の自然環境教育として、またシニア自然



大学校講座生が年間90名ほど訪れる教育実習の場としても活用している。奈良県の委嘱を受けて毎年0.5haの里山林(向山)で行う間伐や枯損木の整備、椎茸栽培や林内遊歩道づくりなどは、近畿大学農学部の学生も参加して実施している。奈良コープと共同で休耕田に栽培する菜の花から油を採取し、廃油をBDF燃料へ利用するエコサイクルを構築し、畝起こしから脱穀までをイベントとして開催、また菜の花の棚田は新たな観光スポットにもなっている。棚田の活気が地域へも伝わり、神事である大どんとかが40年ぶりに復活、菜の花まつり等のイベントでの地元の農産物を販売など、共同草刈りや収穫祭等で住民が集まる機会も増え、地域の活動も活発になってきている。直近1年間(2009年11月~2010年10月)の活動実績は、定例会53回(延べ1503名)、特別活動41回(延べ2766名)と活動回数も参加人数も増加している。